

横溝雄己

戦争報道分析

ーリビア戦争から見る新聞報道のテキスト分析とカダフィ大佐の印象操作の有無ー

要旨

本研究は2011年アラブの春のリビア政変についての新聞報道をテキスト分析することでカダフィ大佐について印象操作と疑われる偏向した報道の有無を調べるものである。

日本の新聞業界の部数低下の一因として挙げられるのが偏向報道である。偏向報道とは特定の事柄について複数の意見がある中で、特定の立場から意図的あるいは無意識的に偏った形で報道することを指す。新聞に関する世論調査では信頼度の低下が深刻な問題となっており、社会のなかの偏向報道への不満も一因であると考えられる。一方で、実際にメディアが偏向報道を行なっているかどうかについては客観的な証拠が乏しい。

検討においては、全国紙三社の政変期間中のカダフィを巡る報道についてテキスト分析を加え、カダフィの印象を必要以上に悪化させる語彙や特定の陣営に偏った報道の抽出を試みたが、三社の報道においてほとんど偏った報道は確認されなかった。

この結果から、国際報道における新聞の報道には偏向は見られないと結論付けた。新聞の編集システムや自律的な報道綱領の存在、国際的な通信社の報道の引用が多いことなどが原因と考えられる。雑誌媒体ではカダフィの政権や当人に対し過激な表現が使われており、こちらでは偏向報道が一定程度存在することがわかった。